

W-5-2

日本語学習者による様態を表すための副詞の産出：

学習者の母語と第二言語での移動・状態の描写における副詞的要素の比較分析

吉成 祐子(岐阜大学)

1. はじめに

本発表では、動作や状態の様子を描写する際に用いられる副詞を取り上げ、日本語学習者の産出傾向を探る。分析において注目するのは、母語の影響である。学習者の母語(韓国語・英語・中国語)での表現と、学習者の日本語での表現とを比較することにより、第二言語における母語の影響を検証する。さらに、母語の異なる日本語学習者の表現を比較することにより、学習者共通の特徴についても考察する。

2. 背景

移動表現の類型論では、移動事象概念(経路、様態など)がどの位置で表されるのかに注目して、言語を分類している(松本 2017a, Slobin 2004, Talmy 2000)。経路を主要部である動詞(主動詞、複合動詞の後項など)で表す日本語(1)や韓国語と、主要部外の要素(前置詞、副詞など)で表す英語(2)では類型が異なる。中国語については様々な分析があるが、(3)のように方向補語を用いて経路を表す。

(1) 犬がバスケットの中から飛び出した。

(2) The dog suddenly jumped out.

(3) 小狗突然从篮子里跳出来。「子犬が突然バスケットの中から飛び出してくる」

経路表示における類型の違いは、第二言語習得研究でも注目され、習得の困難さに関わると指摘されている(Cadierno & Ruiz 2016, 吉成他 2021 他)。しかし、様態表示の相違に注目した研究はあまりない。

類型によって様態の表示位置も異なり、また表示頻度も言語によって異なる。日本語では、様態副詞(e.g. 速く走る、ゆっくり泳ぐ)だけでなく、動詞であっても主要部外の位置(e.g. 歩いて部屋に入る、駆け込む)で表されることが多い。また、オノマトペ(e.g. ピョンと飛ぶ、テクテク歩く)が比較的頻繁に用いられること(秋田・松本・小原 2010)、英語などに比べ、様態の表示頻度が低いこと(松本 2017b, Slobin 2006)が、日本語の特徴としてあげられる。このような言語による違いや、特有の表現を用いる様態の表示は、日本語学習者にとって習得の難しさがあるのではないだろうか。

本発表では、様態に関わる事象(移動・状態)を描写する際の、日本語学習者の日本語での表現と、学習者の母語での表現とを比較し、日本語学習者の様態表示の傾向を、副詞使用に注目し、考察する。

3. 調査方法

「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)」に収録されているストーリーテリングの発話データのうち、様態に関わる場面での描写を取り上げる。対象としたのは、①犬がバスケットの中から飛び出す場面(移動の描写)と、②女性が眠っている場面(状態の描写)である。日本語を第二言語(L2)とするグルー

プの詳細は表 1 に、母語話者による各母語(L1)のグループについては表 2 にまとめている。L1 データは「I-JAS 外国語母語話者コーパス(FOLAS)」¹より、書き起こされた原文データと直訳データを利用した。

表 1. 母語が異なる各日本語学習者グループの習熟度別対象者数²

| 母語 \ レベル | 初級 | 中級前半 | 中級 | 中級後半 | 上級前半 | 上級 | 母語話者相当 | 合計 |
|---------------|----|------|----|------|------|----|--------|-----|
| 韓国語 (J-L2(k)) | 1 | 5 | 8 | 29 | 35 | 20 | 2 | 100 |
| 英語 (J-L2(e)) | 11 | 31 | 33 | 21 | 4 | 0 | 0 | 100 |
| 中国語 (J-L2(c)) | 0 | 2 | 24 | 40 | 31 | 2 | 1 | 100 |

表 2. 母語話者による各母語グループの対象者数

| | 韓国語 (K-L1) | 英語 (E-L1) | 中国語 (C-L1) | 日本語 (J-L1) |
|------|------------|-----------|------------|------------|
| 対象者数 | 15 | 15 | 12 | 50 |

4. 調査結果と考察

4.1. 移動の描写における特徴

4.1.1. 副詞の出現傾向

犬がバスケットから飛び出す場面を描写した表現における、副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度をまとめたものが表 3 である。様態(4)(5)だけでなく、(2)の“out”のような経路を表すものも含んでいる。

(4) バスケットを開けるとピョンと飼っている犬が出てきました。 (J-L1)

(5) 갑자기 흰둥이가 튀어 나왔습니다 「突然シロが飛び出ました」 (K-L1)

表 3. 各言語グループ別 副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度(移動)³

| 言語 \ 特徴 | L1 | | | | L2 | | |
|---------|-------|-------|-------|-------|---------|---------|---------|
| | K-L1 | E-L1 | C-L1 | J-L1 | J-L2(k) | J-L2(e) | J-L2(c) |
| | 13 名 | 12 名 | 11 名 | 47 名 | 86 名 | 75 名 | 81 名 |
| 延べ語数 | 4 | 11 | 5 | 9 | 14 | 13 | 28 |
| 平均出現頻度 | 0.308 | 0.917 | 0.455 | 0.191 | 0.163 | 0.173 | 0.346 |

副詞の平均出現頻度は、L1 間では E-L1 が高く J-L1 が低い。L2 間では J-L2(c)が高い。E-L1 の頻度の高さは、類型の特徴として、(2)のように副詞で経路が表されることによる(11 例中 8 例)。この E-L1 の経路副詞使用を除くと、ほぼどの言語でも様態副詞が使用されていた。ただし、用いられた様態副詞の種類に違いが見られた。日本語において、L2 では共通して「突然・急に・いきなり」といった、動作が急であったことを表す副詞の使用が 80%を超えていた。J-L1 でもその使用は見られたが(44.4%)、同割合で「ピョンと・ぱっと」のような飛ぶ動作を描写する様態副詞が用いられていた。また、学習者のどの母語でも、様態副詞

¹ I-JAS には少数だが、学習者の母語でのデータも収録されており、それを L1 データとして使用している。なお、中国語・韓国語例文の「」内の日本語訳は、直訳データのものである。

² レベルについては、J-CAT のスコアを基準に分類している。詳細は発表①の表 1 を参照されたい。

³ 表内の人数は、当該場面を描写した人数を示しているため、3 節で示した対象者数とは異なる。

は“suddenly”(2)、「突然」(3)、「갑자기」(5)のような、急な動作を表すものに限られていた。このことから、L2で共通する使用傾向の要因の一つとして、母語の影響が考えられる。

4.1.2. 様態概念の表示頻度と表示位置

様態概念がどのくらい表示されるのか、どの位置で表示されるのかをまとめたものが表 4 である。

表 4. 各言語グループ別 様態概念の表示頻度と表示位置別割合

| 言語 特徴 | L1 | | | | L2 | | |
|---------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|
| | K-L1 13名 | E-L1 12名 | C-L1 11名 | J-L1 47名 | J-L2(k) 86名 | J-L2(e) 75名 | J-L2(c) 81名 |
| 延べ様態表示数 | 16 | 17 | 15 | 36 | 38 | 39 | 87 |
| 平均表示頻度 | 1.231 | 1.417 | 1.360 | 0.766 | 0.442 | 0.520 | 1.074 |
| 副詞 (e.g. ピョンと) | 4 (25.0%) | 3 (17.6%) | 5 (33.3%) | 9 (25.0%) | 14 (36.8%) | 12 (30.8%) | 28 (32.2%) |
| 複合動詞 (e.g. 飛び出す) | 11 (68.8%) | 0 (0.0%) | 10 (66.7%) | 27 (75.0%) | 22 (57.9%) | 11 (28.2%) | 39 (44.8%) |
| 単独主動詞 (e.g. 飛ぶ) | 1 (6.3%) | 14 (82.4%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 2 (5.3%) | 16 (41.0%) | 20 (23.0%) |
| 合計 | 16 (100%) | 17 (100%) | 15 (100%) | 36 (100%) | 38 (100%) | 39 (100%) | 87 (100%) |

平均表示頻度は、L1 間では J-L1 が低く、L2 間では J-L2(c)が高い。表示位置は、E-L1 のみ複合動詞がないという点で傾向が異なる。それが J-L2(e)の単独主動詞の割合の高さに影響があるとも考えられる。

様態の表示位置については、日本語学習者にとって複合動詞の使用の難しさが指摘されている(吉成他 2021)。複合動詞を使用せず、(4)のように、経路動詞と様態副詞の共起によって両概念を表示しているのだろうか。日本語の様態表示パターン別に使用割合をまとめたものが表 5 である。

表 5. 日本語における各様態表示パターンの使用割合

| 言語 表示パターン | J-L1 | J-L2(k) | J-L2(e) | J-L2(c) |
|-----------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 副詞のみ (e.g. 突然出てくる) | 6 (12.8%) | 12 (14.0%) | 6 (7.9%) | 8 (9.9%) |
| 単独主動詞のみ (e.g. 飛ぶ) | 0 (0.0%) | 2 (2.3%) | 11 (14.5%) | 17 (21.0%) |
| 複合動詞のみ (e.g. 飛び出す) | 24 (51.1%) | 20 (23.3%) | 10 (13.2%) | 22 (27.2%) |
| 副詞+単独主動詞 (e.g. 突然飛ぶ) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 5 (6.6%) | 2 (2.5%) |
| 副詞+複合動詞 (e.g. 突然飛び出す) | 3 (6.4%) | 2 (2.3%) | 1 (1.3%) | 18 (22.2%) |
| 様態なし (e.g. 出てくる) | 14 (29.8%) | 50 (58.1%) | 43 (56.6%) | 14 (17.3%) |
| 合計 | 47 (100%) | 86 (100%) | 76 (100%) | 81 (100%) |

表 5 を見ると、言語グループによって特徴が異なる。J-L1 は複合動詞のみで様態を表示するパターンが半数を占める。J-L2(k)は様態を表示しないことが多いが、表示する際に副詞との共起パターンはほぼない。

J-L2(e)も同様の傾向が見られるが、表示する際は単独動詞のみで表すことに J-L2(k)とは異なる特徴がある。J-L2(c)は副詞との共起の有無に関わらず、複合動詞の使用が目立つ。

4.1.3. 習熟度別に見た副詞の出現傾向

4.1.1 節では、学習者の母語に注目して L2 での副詞の平均出現頻度や種類を見たが、オノマトペのような語彙の習得の難しさを考えると、習熟度によって、副詞使用の傾向が異なる可能性も考えられる。そこで、習熟度別に使用された副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度、用いられた副詞を表 6 にまとめる。

表 6. 習熟度別 副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度(移動)

| 対象者 特徴 | 学習者 | | | | | | | 日本語母語話者 47名 |
|-----------|-----|-------|-----------------------------|----------------------------|---|-------------------|--------|---|
| | 初級 | 中級前半 | 中級 | 中級後半 | 上級前半 | 上級 | 母語話者相当 | |
| | 7名 | 26名 | 53名 | 71名 | 61名 | 21名 | 3名 | |
| 延べ語数 | 0 | 1 | 13 | 13 | 24 | 3 | 0 | 9 |
| 平均出現頻度 | 0 | 0.038 | 0.245 | 0.183 | 0.393 | 0.143 | 0 | 0.191 |
| 用いられた副詞 | | 突然 | 突然 6 急に 5 いきなり ふっと | 突然 6 急に 5 いきなり 偶然 | 突然 10 急に 8 ぱっと 3 ぽんと ピョンと ふと | いきなり 突然 ぱっと | | 突然 3 ピョンと 2 急に ぱっと わっと 楽しそうに |

動作の様子を描写する副詞(ふっと、ぱっと、ぽんと、ピョンと)の出現は中級以上から見られ、平均出現頻度の高さ、バリエーションの多さも上級前半が目立つ。表 1 で見たように、母語別の学習者グループの習熟度には偏りがある。J-L2(e)は初級から中級前半に集中しており、J-L2(c)は中級が多く、上級のほとんどが J-L2(k)である。この点から、要因分析は母語の影響だけでなく、習熟度も考慮する必要があるが示唆される。

4.2. 状態の描写における特徴

4.2.1. 副詞の出現傾向

眠っている状態を描写した各言語の例と、使用された副詞の延べ語数等を以下に示す(表 7)。

- (6) 2階でぐっすり眠っているマリは、なかなか目を覚ましません。 (J-L1)
- (7) 나영이는 이미 잠에 들어 버렸습니다. 「ナヨンはすでに眠りに入ってしまった」 (K-L1)
- (8) He knocked on the door but Mary remained fast asleep upstairs and did not hear. (E-L1)
- (9) 这个时候玛丽已经睡了。 「この時マリはすでに寝ました」 (C-L1)

表 7. 各言語グループ別 副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度(状態)

| 言語 特徴 | L1 | | | | L2 | | |
|----------|-------|-------|-------|-------|---------|---------|---------|
| | K-L1 | E-L1 | C-L1 | J-L1 | J-L2(k) | J-L2(e) | J-L2(c) |
| | 15名 | 14名 | 11名 | 48名 | 96名 | 87名 | 92名 |
| 延べ語数 | 3 | 18 | 11 | 31 | 59 | 27 | 89 |
| 平均出現頻度 | 0.200 | 1.286 | 1.000 | 0.646 | 0.615 | 0.310 | 0.967 |

どの言語でも L1 と L2 との間に平均出現頻度の傾向に共通したものは見られなかった。L2 間では J-L2(c) の頻度が高く、移動場面の描写と同様の傾向が見られた。

4.2.2. 副詞の種類

使用された副詞は(10)のように分類される。各言語でどのような副詞が用いられたのか、言語グループ別に副詞の種類とその使用割合をまとめたものが表 8 である。

- (10) a. 様態副詞:寝る様子に限定(ぐっすり、すやすや)、限定なし(深く、すっかり)
 b. 程度副詞:(とても、すごく、ちょっと、ほんとうに)
 c. 陳述副詞:否定(全然、まったく、なかなか、どうしても)、推量(たぶん)
 d. 時間副詞:(すでに、とくに、もう、まだ、今)

表 8. 各言語グループ別 使用された副詞の種類と使用割合

| 特徴 | 言語 | | L1 | | | | L2 | | |
|------|--------------|---------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|--|--|
| | K-L1 | E-L1 | C-L1 | J-L1 | J-L2(k) | J-L2(e) | J-L2(c) | | |
| | 15 名 | 14 名 | 11 名 | 48 名 | 96 名 | 87 名 | 92 名 | | |
| 様態副詞 | 2 (66.7%) | 10 (55.6%) | 0 (0.0%) | 16 (51.6%) | 14 (23.7%) | 3 (11.1%) | 21 (23.6%) | | |
| 程度副詞 | 0 (0.0%) | 2 (11.1%) | 4 (36.4%) | 0 (0.0%) | 2 (3.4%) | 0 (0.0%) | 2 (2.2%) | | |
| 陳述副詞 | 0 (0.0%) | 1 (5.6%) | 0 (0.0%) | 8 (25.8%) | 11 (18.6%) | 9 (33.3%) | 23 (25.8%) | | |
| 時間副詞 | 1 (33.3%) | 1 (5.6%) | 7 (63.6%) | 7 (22.6%) | 32 (54.2%) | 15 (55.6%) | 43 (48.3%) | | |
| その他 | 0 (0.0%) | 4 (22.2%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | | |
| 合計 | 3 (100%) | 18 (100%) | 11 (100%) | 31 (100%) | 59 (100%) | 27 (100%) | 89 (100%) | | |

L2 に共通して見られたのは、(11)のような「もう・すでに」といった時間副詞使用の多さである。また、学習者の母語ではほとんど見られなかったにも関わらず、(12)のような「全然・まったく(～ない)」といった陳述副詞(否定)の使用も目立つ。これらの特徴は J-L1 の半数が様態副詞を使用する傾向と大きく異なる。また、K-L1 や E-L1 で様態副詞の使用割合が高いこととも関わらない。眠る様子を描写するのに、時間副詞や否定の陳述副詞を用いるのは、日本語学習者共通の特徴といえるだろう。

- (11) マリはもう寝ていました。 (J-L2(e))
 (12) 眠っていて、それを全然気づかなかったんです。 (J-L2(k))

4.2.3. 習熟度別に見た副詞の出現傾向

4.2.2 節で見た L2 共通の副詞使用の傾向には、習熟度による違いがあるのだろうか。習熟度別に使用された副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度、そして、副詞の種類別にその使用割合を示す(表 9)。

表 9. 習熟度別 副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度(状態)

| 対象者 特徴 | 学習者 | | | | | | | 日本語母語話者 48名 |
|-----------|-------------|--------------|---------------|---------------|---------------|--------------|-------------|----------------|
| | 初級 | 中級前半 | 中級 | 中級後半 | 上級前半 | 上級 | 母語話者相当 | |
| | 10名 | 31名 | 58名 | 84名 | 68名 | 22名 | 2名 | |
| 延べ語数 | 0 | 4 | 36 | 61 | 59 | 14 | 1 | 31 |
| 平均出現頻度 | 0 | 0.129 | 0.621 | 0.726 | 0.868 | 0.636 | 0.500 | 0.646 |
| 様態副詞 | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 6 (16.7%) | 13 (21.3%) | 11 (18.6%) | 7 (50.0%) | 1 (100%) | 16 (51.6%) |
| 程度副詞 | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 1 (2.8%) | 0 (0.0%) | 3 (5.1%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) | 0 (0.0%) |
| 陳述副詞 | 0 (0.0%) | 2 (50.0%) | 14 (38.9%) | 14 (23.0%) | 10 (16.9%) | 3 (21.4%) | 0 (0.0%) | 8 (25.8%) |
| 時間副詞 | 0 (0.0%) | 2 (50.0%) | 15 (41.7%) | 34 (55.7%) | 35 (59.3%) | 4 (28.6%) | 0 (0.0%) | 7 (22.6%) |

副詞の平均出現頻度は上級前半が最も高い。これは移動の描写と同様である(表 6)。興味深いのは、上級で頻度は下がるものの、出現する副詞の種類や割合が、日本語母語話者の傾向と類似している点である。用いられた様態副詞のほとんど(7例中6例)が、眠る様子に限定される副詞「ぐっすり」であったことも、他のレベルでは見られなかった、母語話者との類似点である。

5. おわりに

本発表では、移動や状態を描写する際の日本語学習者の表現を、学習者の母語での表現と比較し、第二言語使用における母語の影響を探った。移動の描写では、様態の表示頻度や位置について、母語の種類による影響が見られた。しかし、副詞使用については、日本語学習者共通の特徴が目立った。特定の動作や状態に限定される副詞(ピョンと飛ぶ、ぐっすり眠る)使用の少なさは、オノマトペの難しさもあり、語彙が未習得であるという要因が考えられる。学習者には、様態を表示しない(出てきた、寝ていた)、あるいは、習得した副詞を用いて表現する(急に出てくる、全然起きない)という選択もあることが示された。母語にはない表現方法をどのように習得していくのかを明らかにするため、学習者の母語別・習熟度別を組み合わせた詳細な調査を行うことを、今後の課題としたい。

参考文献

- 秋田喜美・松本曜・小原京子 (2010) 「移動表現の類型論における直示的経路表現と様態語彙レパートリー」『レキシコン・フォーラム』5: 1-25. ひつじ書房.
- Cadierno, T. and Ruiz, L. (2006) Motion events in Spanish L2 acquisition. *Annual Review of Cognitive Linguistics*, 4, 183-216.
- 松本曜 (2017a) 「移動表現の類型に関する課題」松本曜(編)『移動表現の類型論』1-24. くろしお出版.
- 松本曜 (2017b) 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』247-273. くろしお出版.
- Slobin, Dan I. (2004). The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In: S. Strömquist & L. Verhoeven (eds.), *Relating events in narrative, vol.2: Typological and contextual perspectives*, 219-257. NJ: Lawrence Erlbaum.
- Slobin, D. I. (2006). What makes manner of motion salient? Explorations in linguistic typology, discourse, and cognition. In M. Hickmann & S. Robert (Eds.), *Space in languages: Linguistic systems and cognitive categories* (pp. 5-81). John Benjamins.
- Talmy, L. (2000) *Toward a cognitive semantics Vol. II: Typology and process in concept structuring*. MIT Press.
- 吉成祐子・眞野美穂・江口清子・松本曜 (2021)『移動表現の類型論と第二言語習得』くろしお出版.